埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Students, in the Nursery and Kindergarten Teacher Training Course, Draw Watercolor Paintings Based on Art-and-Craft Textbooks for Elementary School : A Workshop Awakening the Reflection on the Collaboration Between Kindergarten and Elementary School

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木谷, 安憲 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1135

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

保育者になる学生が
小学校各学年の図工教科書の図画を描く
── 保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラム ──

木　谷　安　憲

Ⅰ　はじめに

平成 30 年度より，新しい保育所保育指針，幼稚園教育要領，幼保連携型認定こども園教育・保育要領が施行される。その中には，幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿というものが明記されている。今後その 10 の姿というものが，保育者と小学校の先生，幼児教育と小学校の学校教育との接続に関する共通理解を促す役目を果たすことになるのだろう。共通理解が必要ということは，現在はまだ難しい部分があるということである。一前春子は「幼児期の教育と児童期の教育の手法や内容の違いから生じる不連続性を子どもが自分の力で乗り越えていくことが可能になるよう支援していくことが保幼小連携の取り組み」[(1)] と述べている。

それでは現在，保育所，幼稚園，こども園と小学校の接続に関して，どのような連携が行われているのだろうか。国立教育政策研究所の website[(2)] を見ると，埼玉県草加市，東京都港区，東京都品川区，東京都杉並区，神奈川県横浜市，福井県，大阪府八尾市，兵庫県姫路市，高知県高知市，大分県の事例が取り上げられている。自治体ごとに小学校入学後のスムーズなスタートが切れるよう，さまざまな取り組みがなされている。園児が小学校に行き一緒に活動する連携も多いようだが，「小学校教師（図工・音楽などの専科の教員）が園へ出向いて体験授業する活動が一部行われて」[(3)] いる例も，わずかではあるがあるようだ。東京都品川区の第一日野グループ[(4)] では，育てたい子ども像に合わせた 0 歳から 12 歳までのカリキュラムを作り，小学校教師の一日保育士体験など教職員の関係を深めるための手だても行っている。

子ども達によりよい教育の質を保証するため，保幼小連携について保育者・教育者になる前から意識を持つことは，今後ますます必要になってくるはずだ。本研究は，保育者養成校で造形を教える教員として学生に保幼小連携について考えるきっかけとなるプログラムを作り，その成果について考察していくものである。

Ⅱ　研究に至る問題意識と目的

1. 学生にとっての保幼小連携

平成 30 年度を前にして，保育所や幼稚園やこども園（以下，この三つの施設をまとめる呼称を「園」とする）は，今後，幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿を意識しながら保育を行うことになる。しかし，そうは言っても小学生になる姿は今までも想像しながら保育を行ってきたはずだ。小学校に行った卒園児の姿から，今の園児の未来を想像しているかもしれない。言葉として明確になったとは言え，園であれ保育者であれ，それぞれどうすれば 10 の姿に近づくかというイメージは持っているだろう。

しかし，学生はそうではない。園に実習に行って園児と接していても，保幼小連携のことまでは思い浮かばない者がほとんどだろう。日々，目の前のことだけで精一杯になっているはずだ。園児にどう向き合っていくか，ということを模索している段階で，その先の小学校について考える余裕はない。では，園児と接することのない普段の生活の中で保幼小連携について考えることは容易か。それも手がかりがなく難しいだろう。ではどうするか。園児や小学生と直接触れ合うことがなくても，造形の研修プログラムをうまく活用すれば考えるきっかけをつくることができると考えた。

2. 造形・図工の研修プログラム

現在，そのような造形・図工の研修があるのだろうか。造形作品や図工作品の展示を通しての連携・交流の例はあるが，保幼小連携の職員研修の中に図工を中心としたものは見当たらなかった。その理由として考えられるのは，連携に必要で重要なことがあまりにも多いからだろう。表現が 5 領域の一つになっているとはいえ，10 の姿の 10 番目に豊かな感性と表現ということが書かれているとはいえ，音楽や造形活動が楽しかろうが上手くいかなかろうが，そのことで小学校生活に大きな支障を与えることはないと認識されているのだろう。

早急に必要でなくとも，長い目で見れば必要なものもある。小松佳代子は，正式名称ではないが周辺教科と呼ばれてしまう音楽・美術・体育・家庭科は，「身体に基礎づけられるかたちで，一人ひとりに固有の感覚や感性を豊かにしていくと同時に」，「他者との一体感や，微妙な駆け引き，あるいは他者への気遣いといった，社会的な感覚も育てていく。つまり一人ひとりの子どもの感性や身体を通じて個性を伸ばしていくことと，他者との社会的な関係を育てることが一体となっている学び」[(5)] であると論じている。

ところで現在まで行われてきたさまざまな研究は，保育者や先生が園児・児童にどう向き合え

ばいいのかを問うものが多い。他者をどう理解していくか，という視点である。しかし，学生には向き合うべき園児がいない。そうなれば自分と向き合うしかない。それも，子ども時代の自分である。自分の子ども時代を知り，自分の子ども時代の内面を感じ，その視点を持って園児と接してみる。保幼小連携について考えるために，まず小学校時代の自分を思い出してみるのだ。そのことで新しい視点が獲得できるのではないか。つまり，子どもを外側から観察するだけでなく，内側から自分のことのように見る視点を獲得することを目指しているのである。そういう視点を持つことで，人を多角的に見ることができ，深い子ども理解につながると考えた。

ここまでのことをまとめると，絵を描くことで童心に帰り，ものごとに対して能動的に関わる姿勢を身につけることが本研究の目的になると考えた。何かに取り組む際，外から見るだけではなく実際に自分ができることを行動に移すということが，受動的ではない，何かをつかみ取ろうとする姿勢であるからだ。そして，実際に行動に移せば，自分の内面が形として残るというものが表現であり造形の特徴なのである。

Ⅲ　研究の方法

1. 対象

本学こども学科に平成 29 年度に入学して，後期より木谷ゼミに入ってきた 10 名が対象者である。本年度入学生 147 名に入学後，あなたは造形・図工・美術が好きですか，というアンケートを行った。

①	とても好き	約 1 割（全学生）	3 名（ゼミ生）
②	まあまあ好き	約 4 割（全学生）	5 名（ゼミ生）
③	普通	約 3 割（全学生）	1 名（ゼミ生）
④	あまり好きではない＋⑤嫌い	約 2 割（全学生）	1 名（ゼミ生）

この結果から見て分かるように，造形のゼミを希望するだけあって，絵を描くことが好きな学生が多い。また，④のあまり好きではないを選んだ学生は制作日に欠席したため，このプログラムに参加した 9 名は，図工に対してほとんど苦手意識を持っていないと察することができる。

2. 方法

制作に関しては 1 日で行えるプログラムを考案した。小学校各学年の図工教科書の図画をこちらが 1 枚選び，学生がその題材を描くというものだ。1〜6 年まで合計 6 枚の絵を仕上げること

になる。そしてその後で自分の顔のアップを描き，出来上がった７枚を自由に組み合わせて自己紹介の紙芝居をつくる。後日，その紙芝居を幼稚園児の前で演じ，さらに日を改めて振り返りをする，という流れだ。使用した教科書は開隆堂で，以下に題材別評価規準と年間指導計画[6]を参照し，「題材名」，図画工作科を通して育てたい力，題材の課題・目標を記す。

１年「できたらいいな，こんなこと」　自分らしい表現を追求したり，発見したりする
「したことやみたことからそうぞうしたり，かんがえたりしてかきたいことをおもいつく」ことを通して，試したり，見つけたり，考えたりして，思いつく力を培う

２年「えのぐじま」　造形表現活動の快さやたのしさを経験させ，心を開く
「ふでで絵のぐをぬることをたのしむ」ことを通して，心を開き，楽しく活動する力を培う

３年「ふしぎな乗りもの」　造形的なものの見方や考え方，造形感覚を養う
「身近なものから思いついた乗りもののかき方をくふうする」ことを通して，形や色，方法や材料を工夫する力を培う

４年「へんてこ山の物語」　自分らしい表現を追求したり，発見したりする
「へんてこ山」という言葉から想ぞうしたり，考えたりして，表したいことを思いつく」ことを通して，試したり，見つけたり，考えたりして，思いつく力を培う

５年「春を感じて（今回は「季節を感じて」に変更した）」
自分らしい表現を追求したり，発見したりする
「身近で感じることを見つけたり，かく材料を選んだりして，表したいことを思いつく」ことを通して，試したり，見つけたり，考えたりして，思いつく力を培う

６年「感じたままに花」　造形表現活動の快さや楽しさを経験させ，心を開く
「感じたことを大切にして，花をかくことをたのしむ」ことを通して，心を開き，楽しく活動する力を培う

この６つの題材を選んだのは，後で自己紹介の紙芝居にしやすいだろうという理由だ。ただ，１年生では「すきなものいっぱい」，２年生では「どうぶつさんといっしょに」，３年生では，「友だちといっしょに」，４年生では「木々を見つめて」，６年生では「墨のうた」「わたしのお気に入りの場所」という題材も魅力的だった。しかし解釈を変えれば色々と使えそうで，それぞれつな

げても関連ができそうで，園児が喜ぶ絵に仕上がりそうな題材がよいと考えた。学生が童心に戻りやすそうかどうか，ということも判断の材料になっている。また，短時間で行うため版画や色々な素材を使う絵は外した。

この題材と学習指導要領 A 表現⑵との関連[7] で言えば，「形や色，材料から発想する絵画題材」は，2 年，6 年の 2 点。「言葉やお話から想像したり，発想したりする絵画題材」は，1 年，3 年，4 年の 3 点。「見たことや経験したことをもとに表す絵画題材」は，5 年の 1 点。「版に表す絵画題材」，「伝え合いたいことや飾るものを表す絵画題材」，「仕組みや造形的な操作から発想する絵画題材」は，なしということになった。最後に紙芝居にする段階では，学習指導要領 B 鑑賞の能力を働かせることはもちろん，第 3 学年及び第 4 学年の共通事項であげられている「ア　自分の感覚や活動を通して，形や色，組み合わせなどの感じをとらえること。」，「イ　形や色などの感じを基に，自分のイメージをもつこと。」と非常に近い活動になっている。

Ⅳ　実践の概要

1. 1 日目　制作

この，小学校各学年の図工教科書の図画を描き紙芝居にするプログラム（以下，図画紙芝居プログラム）は，2017 年 8 月 25 日に本学図工室で行われた。時間は午前 10 時から午後 4 時 30 分まで，参加者は本年度後期から木谷ゼミに来る学生 9 名である。ゼミは 9 月から始まるのだが，その前の特別活動ということで参加を促した。最初に本日行う図画紙芝居プログラムの説明をした。図工の教科書の題材を 1 年から順々にかいていくこと。小学校 1 年の題材なら，自分が小学校 1 年の頃を思い出しながら描くこと。時間的な余裕がないことと，のびのび描いて欲しいので鉛筆による下描きはなるべくしないこと。でも，したければしてもいいこと。全員が描き終わったら次の題材を説明すること。あせって欲しくはないけれど，あまりゆっくりもしていられないこと，などである。

小学校時代の絵をその時の気分を思い出しながら描くのは，保育者として力になるという話もした。保育者・教育者が，自分が園児・児童だった頃を追体験すれば自分の子ども時代の感覚が少しは蘇るのではないか。そのことで，外側から観察するだけでなく，子ども達の内面も感じることができるのではないか。一度自分の童心を取り戻せれば，子ども達のことも内側から自分のことのように見る姿勢を身につけることができるのではないか。そう話した。最後に紙芝居をつくるということは伏せておいたが，今回の絵は全部横にして欲しい，ということは理由を言わずに付け加えた。

説明の後は，全員に前に集まってもらい教科書を見せながら見開きページに描かれている文章

を読み，一つひとつの作品タイトルを読み上げ，図版を指差しした。あまり指示はせず，どう描くかは自分で判断してもらった。学生には紙芝居サイズの厚紙を渡し，色は水彩絵の具の使用とした。クレヨン，クレパスは紙芝居にした時に擦れてしまうので，理由を言わずに使用不可と告げた。筆者はこの場で先生という立場というより，一緒にこの図画紙芝居プログラムに参加するメンバーの一員として振る舞いたかったので，B5 サイズの紙に筆ペンで同じ題材を描いた。1 枚描き終わる度に題名と，その絵の説明を A4 のシートに記入してもらった。

ひと題材について 1〜2 回机間巡視をしたが，先生としてのコメントは控えた。ただ，「プリキュア描いていいですか？」と聞かれた時は，1 年の題材で今後の方向性を決めてしまうので，「いいですよ」と答えた。本来の図工の時間では避けたいと思ったが，今回は童心に帰ること目的としているので，このような質問をしてくれたのは却ってよかったのかもしれない。昼休みを 30 分取って後半は 4 年生の絵からスタートした。午後 3 時少し過ぎた頃に 6 枚とも仕上がった。その後，筆者の筆ペンで描いた絵を例にして，自己紹介の紙芝居をつくる説明をした。説明終了後，自画像を描いてもらい，文章をつくり，一人ひとり出来上がった紙芝居を発表し，本日の感想を言い合って 4 時 30 分頃終了した。

2. 2 日目　紙芝居

8 月 30 日に筆者がプランニングした造形ワークショップが F 幼稚園で行われた。紙芝居を作った 9 名が学生ボランティアとして参加した。年長 3 クラスはホールで合同開催し，年中 3 クラスと年少 3 クラスはそれぞれの教室で行った。学生 9 名を 9 クラスそれぞれに配置し，そのクラスに入った時に紙芝居をつかって自己紹介をしてもらった。年長クラスに入った 2 名は，教室で自己紹介できなかったので，ホールに来た後，年長 3 クラスの前で紙芝居をした。その後，造形ワークショップが行われた。

3. 3 日目　振り返り

9 月 21 日。ゼミ初回。実際に園児の前で発表してみてどんな感想を持ったか。この制作をして何がよかったか。身についたと思う力は何か，などについて感想を言い合った。絵を描いた学生のうち 1 名が欠席。作品・紙芝居の一覧表は 3 日とも出席した 8 名で制作した（表 1〜4）。

Ⅴ　考察

この図画紙芝居プログラムは，2 部構成になっていて，練習だと思っていたら途中から試合が始まるような，参加者が驚くような展開をあらかじめ用意している。突然，紙芝居を作らなくて

はいけなくなるので，ここまで大切にしてもらっていた童心に帰るということから，一気に大人の気分に再び戻ってきてもらう。そうするとどうなるか。自己紹介の紙芝居を大人の気分でつくろうと思った時には描けないような絵が沢山できているのである。学生達は，こちらが予想した以上に童心に戻って絵を描いていたのだと思う。実際に，授業で作ってもらっている自己紹介の絵本で描かれる説明的で記号的な絵とは，かなり趣の違う絵なのだ。今回できた絵ならば，自己紹介でない紙芝居もつくることができるだろう。

一日で７枚の絵を仕上げたのは時間的な制約があったからだが，短時間で１年生から６年生に成長する変化を疑似体験できた。 制作の日が変わらず気持ちもリセットされなかったので，変化をトータルに感じていたようだ。こういうことを他の科目でできるか考えてみた。国語の教科書を読む，社会の勉強をする，鉄棒やマット運動をする。それらは大人になるまでに積み上げた経験を切り離すことが難しい。漢字は読めるし，行った場所や歴史の知識も増えているし，身体は動く（か，子どもの頃より動かなくなっている）。しかし絵を描くことなら，子ども時代の感覚を取り戻すことは比較的容易だ。それは，絵を描くという行為が日常生活の中で忘れ去られていることも要因の一つかもしれない。日頃，絵を描いていない人は，描くこと自体が自分の感性や身体に懐かしさを感じさせるからだ。仕上がった絵を並べてると，今の自分と子ども時代の自分が同時に表現されていることだろう。

子どもを外側から観察するだけでなく，内側から自分のことのように見る能動的な姿勢を獲得できるような図画紙芝居プログラムだが，そこには三つの転換がある。

① 子どもになって描く（時間の転換）
② 描いたものを紙芝居にする（媒体の転換）
③ 紙芝居を子どもにみせる（送り手受け手の転換）

実際に書いている瞬間は，その時に集中する。童心に戻ろうといっても，描いている時間は現在である。現在ではあるが，童心に戻ろうと時間を転換させている。同じ時間の中で今の自分が子どもの自分を意識し，子どもの自分が今の自分を意識するということが起きうる。また出来上がった絵を紙芝居にするためには，自分の作品に別の解釈を入れなくてはならない。そんなつもりで描いたものでなくても，こういう風にも見えるかもしれない，こう受け取ってもらおう，という読み取りが出てくる。媒体が転換することで多角的な視点で自分の作品を見ることが必要になってくる。そして受け身でいても問題のなかった活動から，園児の前に立って演じる側になるというのは，送り手受け手の転換である。立場を変えることで，今まで見えなかったものが見えてくる可能性が高い。また，子どもに自分の絵だけを見てもらうことよりも，紙芝居を見てもら

表 1　立て列に同一人物の絵を配置・上から順に 1〜6 年生の題材

「お花畑でおにごっこ」
カラフルな花いっぱいの野原の上で大好きな友達とおにごっこがしたい。

「力を合わせて」
プリキュアは強くてかっこいい＋プリキュアになって一緒に悪者をやっつけたい。

「海のおさかなたちと楽しいお散歩」色んな色のさかなとなかよくお散歩している海に住んでいる女の子。

「ドラえもんと一緒に大空を飛びまわりたい」
ドラえもんと一緒＋大空を自由に飛ぶ

「太陽の光に照らされて」
太陽の光をたくさんあびてキラキラしている島。大きく波うっている海が特徴的。

「雨のあとがのこる島」
何もないところにえの具の雨によって、きれいに色どられた島。

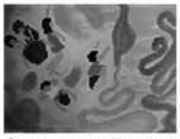
「絵の具の川が流れる島」
カラフルな絵の具の川がたくさん流れている島で人は住んでいない島。

「絵の具島の裏と表」
ピンク島、赤島と黄緑島は夜。裏側は穏やかな晴天。さらに新しい山が増える。

「きのこ船海の中を大冒険」
きのこの形を工夫しました。さまざまな色をとり入れて、普通の海ではない世界観。

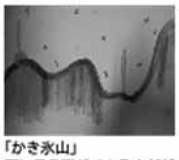
「机列車で宇宙の旅」
工夫したところは、机と机を巾着袋でつなげたとこです。

「フォークのジェット機でスイーツの惑星へ」
この惑星にあるスイーツは食べることができる。



「おいしいものに乗って体の中を探検」工夫したのは食べものをおいしそうに描くこと。人間にも動きをつけた。

「さかさまお山」
山も木も逆さま。空から山ができているけど絶対地面に落ちない不思議な山です。



「かき氷山」
夏に見る事ができる山だが見れるのは1分程度、すごくやわらかいため登れない。

「なみなみ山」緑の山には男の子、ピンクの山には女の子、オレンジの山にはおじいさんおばあさんがいる。

「レベル UP 山登り」
情熱の赤い山から始まる旅。うまくいけば、ツルツルのガラス山に到達できる。

「秋のおとずれ」
夏から秋に変わる切ない様子が描きたくて、海に浮かぶ夕日を近くに描きました。

「真夏の日差し」
高い所（山？）から木の影にすわって、下の都会の景色を見ている様子。

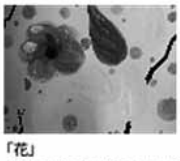
「夏を感じて」
青い空と広い海に夏の風物詩を混ぜた。島がスイカのように見える。

「夏を感じて」青々とした緑の強く強く伸び広がる感じを描きました。少し鋭い葉にし、枝も、角々とさせました。

「花とつる」
希望や前向きな気持ちを表現して大きく花を描いて、花のつるは心の中の複雑な心情を表現しています。

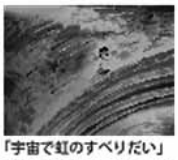
「バラは負けない」
いばらの中を進むと、そこには沢山のバラが元気に咲いていた。明るい色を取り入れた。

「花の気持ち」
花にも人や動物と同じで感情があることを表現した。青は悲しい、ピンクは恋、黄色は元気を表している。



「花」
着物に描きたい花をイメージしました。新しい花を描きたかったけど・・・難しいです。

表 2　立て列に同一人物の絵を配置・上から順に 1〜6 年生の題材


「宇宙で虹のすべりだい」
あの大きな虹をすべってみたい」+「虹を使って宇宙のプラネタリウムを見たい」

「スイーツの国（甘い国）」
スイーツでできた家や道。すべてスイーツでできた国に住んでみたい。

「色々な色のくもの上でわたあめを食べたい」
くもを食べたい気持ちがあったので描いてみた。

「くらげのおうち」
海の中に家を建てたい
＋
くらげの中に入りたい

「カラフル石のカラフル島」
この島には多くのカラフルな石が流れてくるため、それを集めて暮らせる！

「星の島」
夜になると星が光る。人は住んでいない。まわりには星のカケラがとれることも。

「しましまな島」
しましまにすることでカラフルになるのではないかと思って描いてみた。

「お花と葉っぱの大自然島」
カラフルなお花に囲まれた自然いっぱいの島。花のつるやくきが島の中の道になっている。

「筆ほうきでお絵かき」
のりものは絵の具の筆で、ポタポタたらしたり、筆先をすべらしたり。

「空飛ぶうんてい」
工夫したところはカゴをつけて乗りものらしくしたところ。

「はらっぱ線を通るくつ型新かん線」
うごくときちんと座れない。くつ下が 360° みわたせる。

「ロケットえんぴつと文房具の宇宙列車」
列車の車輪がセロハンテープになっている。

「自然山」水の道を通って実を食べながら花の頂上で動物たちと楽しくおしゃべりできます。

「山の家族」
この山の家族はとても仲がいい。動物はいろいろ住んでいる。最後まで登った人はいない。

「くだものの山」
お母さんにないしょでくだものにのぼってたべる！

「プリンとロールケーキのおかしの山」
さるや鳥、うさぎなどさまざまな動物がくらしている。

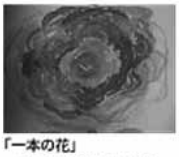
「秋の楽しみ」
もみじやいちょうなど色どり豊かな空間の中で１つのもみじ一点にしぼりました。

「うみの夏」
夏はうみがとてもきれいに見えているように私は感じるからうみを描いた。

「友達とみんなでゆかた着て花火大会」
花火大会に行きたかったので絵にしてみた。

「カラフルなきのこの木と秋の味覚」足元のちいさなきのこを大きな木にしてみた。秋の森を表現した。

「ひまわりのように」
ひまわりという花は大きく強く成長し、元気と力強さを与えてくれます。


「一本の花」
一本で色んないろの花があったらすてきだなと思った。工夫したところは白を所々に入れたとこ。

「虹色の 画用紙にはいりきらないほどの花」
6年最後ということだったので思い出をぎゅっと一枚に花びらにして描いた。

「雨上がりの花」
雨上がりの、たくさんの水をあびて太陽に照らされている生き生きとした花。

表 3　立て列に同一人物の絵を配置・上から順に読めば自己紹介紙芝居

表 4　立て列に同一人物の絵を配置・上から順に読めば自己紹介紙芝居

う方がスムーズに進むだろう。童心に戻って描いたものを大人になった自分が子ども達に見せるのだ。いずれの転換も多角的な視点を獲得することにつながるだろう。

子どもの多様性を認め受け取る力を育てるには，自分の中にある多様性を感じ取る力を認めることがまず必要になる。子ども理解に関してさまざまな取り組み考察がされているが，自分の子ども時代を振り返って理解する，という取り組みは少ないのではないか。実技を通して身体感覚を使って自分の子ども時代を感じることで，目の前にいる子ども達に対する理解が「体感からの共感」という，今までとは違った角度からもできるのではないか。そういう視点を身につけることができたならば，園児達がどんな小学生になっていくのか，小学校の先生とどう連携していけばいいのか，という問いに対しても柔軟に対応する力がついていくと考える。

Ⅵ　おわりに

学生の感想の中には，「子どもの気持ちに寄り添った活動ができた」「子どもの想像力にこたえられる人になれる気がする」「この活動で直感的に絵を描く楽しさを学んだ」「子どもへ何かテーマを投げる時に，いつも一度自分がやってみる事で，子どもの気持ちの理解が深まると改めて感じました」「6 枚を一気に描くことでアイディアをふりしぼることができ，子どもの頃どんな絵を描いていたかを思い出すことができた」「まったく違う絵なのに紙芝居というものにしただけで絵がつながっているように感じられた」「年齢によって違う視点や考え方があり，それに合わせた活動内容やねらいを設定することの重要さを学ぶことができました」「今回は個人で絵を描いて紙芝居をつくったけど，これを複数人でやったらグループの活動とかにも生かせるのではないかと考えた」というように，さまざまなものがあり，有意義な活動と認識してもらえたようだ。

多角的な視点を獲得することを目的にした，この図画紙芝居プログラムは，違った三つの要素の転換を織り込むことで，参加者がさまざまな解釈を生み出し，互いに影響を与え合うことも分かった。このように色々な要素がかけ合わされていると何かを発見した時，与えられたものというより自分で見つけたものであるという感覚を持てる。またそれぞれに多くの可能性を持っているので一人では全部は見つけられない。だからこそ人の意見を聞くことが興味深くなる。これは一人で行うよりも複数名で行う方が，効果がある取り組みであろう。保幼小連携を考えるきっかけとしてのプログラムではあるが，もう少し幅のある，自らの体験を通して子どもを理解するためのプログラムとなったのかもしれない。

一定の成果を確認できた実践ではあったが，今回は学生の感想の省察ができていない。今後はこのプログラムの感想や言葉についての分析にも取り組みたい。また，この図画紙芝居プログラムを園の保育者や小学校の先生と行ったらどういう成果が上がるのだろうか，それも興味深い。

この二つを今後の課題としたい。

謝辞

本研究に参加し作品掲載・作品文掲載など色々と協力してくれた，17C 木谷ゼミのみなさんに感謝します。

《註》

（1） 一前春子，2017,「第 10 章　考察」『保幼小連携体制の形成過程』風間書房，p. 213

（2） 国立教育政策研究所 HP（http://www.nier.go.jp/youji_kyouiku_kenkyuu_center/information.html/2017/9/27，2017/9/26 アクセス）

（3）『幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究〈報告書〉平成 29 年（2017 年）3 月研究代表者渡邊恵子』「3 章幼小接続期の育ち・学びを支える力を捉える手法の検討　第 3 節調査協力校園における幼小接続の実態と育ち・学びを支える力」（掘越紀香・北田沙也加）p. 106（https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf，2017/9/26 アクセス）

（4） 秋田喜代美，第一日野グループ，2000『保幼小連携育ちあうコミュニティづくりの挑戦』，p. 126

（5） 小松佳代子，2012,「第 5 章まとめ ──「周辺教科」を学ぶ意味 ──」『周辺教科の逆襲』，叢文社，p. 173

（6） 図画工作：小学校：開隆堂出版株式会社／小学校図画工作教科書（平成 27 年度用）題材別評価規準と年間指導計画（案）（http://www.kairyudo.co.jp/contents/01_sho/zuko/h27/index.htm，2017/9/26 アクセス）

（7） 図画工作：小学校：開隆堂出版株式会社／小学校図画工作教科書（平成 27 年度用）教科書内容案内（http://www.kairyudo.co.jp/contents/01_sho/zuko/h27/naiyoannai.pdf，2017/9/26 アクセス）

参考文献

文部科学省，2008,『小学校学習指導要領解説 図画工作編』，日本文教出版

小学校図画工作教科書（平成 28 年度）『ずがこうさく 1・2 年上　わくわくするね』,『ずがこうさく 1・2 年下　みんなおいでよ』,『図画工作 3・4 年上　できたらいいな』,『図画工作 3・4 年下　思いをこめて』,『図画工作 5・6 年上　心をつないで』,『図画工作 5・6 年下　ゆめを広げて』，開隆堂出版

大宮勇雄，川田学，近藤幹生，島本一男（編集），2017,『どう変わる？何が課題？　現場の視点で新要領・指針を考えあう』

（提出日　2017 年 9 月 30 日）